

詩の朗読

「南桂子と3人の詩人」―2月のなみおと―



「南桂子生誕100年記念展」では、南桂子の銅版画とあわせて、3人の詩人の詩を展示しています。谷川俊太郎さんが以前南桂子に寄せた詩と、蜂飼耳さん、文月悠光さんが南桂子の作品を3点選んで書き下ろした詩です。そして2月20日、詩の朗読イベントを開催しました。南桂子の作品と現代詩が響きあい、会場いっぱいが叙情的な雰囲気につつまれました。(写真：右から谷川俊太郎氏、蜂飼耳氏、文月悠光氏。)

ので、隠された一面がおりなんじゃないかと思った。凱旋門の通りの上のほうにあるアメリカ風のカフェでハンバーガーをちごちごになつたら、美味しくてびっくりした。そんなことばかり覚えています。お二人の人柄とハンバーガーが結びついてしまつて。

蜂飼：最初に見たのは、谷川さんの詩集、『うつむく青年』(山梨シルクセンター出版部50年)の挿絵ですが、南さんの絵と改めて意識するようになったのは、オスカーワイルドの文庫『幸福の王子』(新潮文庫2003年)のカバーですね、大きな花に小さな小鳥をとまらせる、そのアンバランスなところが印象的で忘れられない。私にとつての南さんの絵というのは、モチーフがかわいいのにもかかわらず、どこか厳しいところが魅かれます。

文月：今回詩をかくにあたり「落葉」という作品は迷いなく選びました。鳥が葉っぱの中に閉じ込められているのに、どこか安心したような表情で、祈っているようにも見えます。私もその中に浸るような気持ちになって、詩的なイメージが自然と浮かびました。

そして、夜には
たてがみが生えてくる。

胸の鼓動を釣り上げる勢いで
ずんずと芽吹きはじめるのだ。



銅版画：南桂子「湖と城」(1986年)
詩：文月悠光「たてがみ」より一部抜粋

文月：私も最初モチーフを見たときに、かわいらしな、メルヘンチックだなと思ったんですが、鳥とか、猫とか、生き物たちの表情や目つきが、混沌としたところを見ているように感じられて、何かその描かれているものが見ている私へ入り込んでくるような印象を受けて、かわいいだけではないんだなと気づきました。

蜂飼：私は以前にも何度かここ(美術館)を訪れているんですね。テーマごとに違う組み合わせで並んでいるので、それを見るたびに同じ一枚の絵がちよつと違う物語の中から出てくる感じがして、それが面白いと思っただけですけどね。

谷川：ちよつと話変わるけど、よく人を視覚型と聴覚型と分けたりしますが、お二人はどつち？僕はあきらかに聴覚型。

蜂飼：私もどつちかというところ「耳」なんで聴覚型ですよ(笑)。詩を書く時もどうしても音が合わない、この単語やつぱり使つたやめよつて時があります。

文月：私はかなり視覚によつていてと思います。映像や写真のように切り取られた風景を、言葉で描写していくような感じに近いです。

谷川：詩の最初の発想は？

蜂飼：なんともいえないころモヤモヤしたもの、イメージみたいなものが、この辺(頭のあたり)にあつて、何かのきっかけでそれが形になっていくという感じです。

文月：モヤモヤするというのはよくわかります。

谷川：そのモヤモヤを、意識下にある「意味可能体」と呼ぶ学者もいるんだけど、自分でも思いがけない言葉がぽこっと出てきて、それをパソコンで打ってディスプレイで見ると、自分の眼と同時に他の者の眼が働き始める、そついうなんか右脳と左脳の往復運動みたいなことしながら詩が形を成していくから、言葉がどつからくるのかホントよくわかんないよね。

2011年2月20日 会場：ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション

谷川：うちの父親が絵や骨董を収集する人で、浜口さんの「パリの屋根」がうちの壁に掛かっていたので、浜口さんのことはよく知っていました。1950年代の始め浜口さんと南さんの展覧会が東京の画廊であつて、その時に初めて南さんの銅版画を見ました。丁度僕は初めてエッセイ集を出そうとしていたところで、口絵に使わせてもらつたんです。浜口さんと南さんの二人の絵で最初のエッセイ集『愛のパンセ』(実業之日本社1955年)を飾らせてもらったという縁がありました。ご本人には1966年に初めてヨーロッパに行った時に、パリでお会いしたんですね。南さんは浜口さんの脇でおとなしくされていたけど、お顔を見ると強い顔をしていらつしやる

蜂飼：「海辺」は少女とその生き物の間にある、不思議な距離感が絶妙に切り取られてる。ちよつと離れたところから対象を見るみたいな感じが、南さんの心の中にある側面をすごく表しているんじゃないかなと思います。

最も初期の頃の作品をひとつと思ひ、選んだのが「月」です。初期の作品の女の人の顔は面長で、ちよつと目つきも怖いものが多いですよ。その中では穏やかな感じにも見える作品で、両手の中に花を抱えている。そこからイメージして書いた詩です。

抱えていたものは抜け落ちた
すつかり からになる腕のなか

その暗闇へつぎつぎに

なげこまれる海と山、波、霧



作品：南桂子「月」(1954年)
詩：蜂飼耳「この道はだれかの口へつづいている」より一部抜粋

谷川：僕はお二人と違つて一枚の絵についてではなく、南さんの全体のイメージで以前書いたものです。一番最初に書いた「そして日々が」という詩は、パリでお会いした時、南さんの生活で見たものをちよつと聞いていたことが背景にあるような気がしますね。

「銅のフェティシズム」という詩のなかで、『魂のマチエール』つていう言い方をわりと気に入ってるんです。そのものは見ることもできないし触ることもできないけど、自分が感動する絵の一番底にあるのはその絵の持つ意味とかよりも、全体から受ける一種のマチエールというか、それが作家の魂の材質感、テクスチャーつていうのもじゃないかなと思つて書いた詩です。南さんは最初から静けさがあるんじゃないかと、すごく怖いもの、ちよつと不気味なものがあるんだけど、その後静けさがあるというそんな感じがするんですけどね。

ただひとつの感触
決して触れ得ない
あの自らの
魂の
マチエール

詩：谷川俊太郎「銅のフェティシズム」より一部抜粋